

ワンバイエイト  
1×∞

経験値1で  
レベルアップする俺は、

最速  
で

異世界最強に

なりました!

5



Yutaka Matsuyama

著 マツヤマユタカ

絵 藍飴



## カイゼル

帝国軍最強と謳われる  
グリンワルド師団の長。

## ワイズマン

元々は敵対するゼークル  
伯爵の用心棒だったが、  
カズマたちの仲間になる。

## レオ

アルデバラン王国第一  
師団参謀長の長子。父  
譲りの頭脳派。

## アリアス

アルデバラン王国の  
王女。隣国に到着し、  
国の再興を目指す。治  
癒魔法を使う。

## ゼロス

ネメセスという種族の  
モンスター。人語を話  
すこともできる。

## カズマ・ナカミチ

本編の主人公。トラックに轢か  
れ、気づけば異世界にいた。あら  
ゆるスキルが経験値1でレベル  
アップする。

登場人物紹介

CHARACTERS

## 第一章 刺客？

異世界に飛ばされた僕——カズマ・ナカミチは、何をやってもあらゆるスキルのレベルが経験値1で上がる。そのため、見知らぬ土地での生活やモンスターとの戦いなどを楽々とこなせていた。ベルガン帝国に侵略されたアルデバラン王国を再興すべく、戦力強化のためにモンスターをテイムしようと旅に出た僕と、仲間であり軍師のレノア。僕らはその旅の途中で黒ヒョウに似た知性のあるモンスター、ネメセス族のゼロスと出会う。

彼は同族を、姿を透明にできる謎のモンスターに皆殺しにされていた。僕は彼の仇討ちを手伝うことにし、その相手を追う。

ゼロスの仇の後をつけていくと、そこにグラドウスという悪魔がいた。僕は彼と戦うがまるで歯が立たず、意識を失ってしまう。

再び目を覚ましたときにいたのは、以前出会った漆黒の翼を持つ男——エニグマ。彼がグラドウスを倒したと言うが……



「そうか……僕はまったく歯が立たなかった。一回吹き飛ばされて、それで終わりだったから……」

僕は、内から湧き上がる悔しさを必死で押し殺しながら言った。  
するとエニグマが苦笑する。

「相手は悪魔だよ？ 君がいくら特殊な人間だといっても、悪魔相手では歯が立たないのも仕方ないさ」

「そうかもしれないけど……」

エニグマがじつと僕を見つめた。

「自分は無敵だと思っていた？」

そう。僕はいつの間にかそんなふうに考えるようになっていた。

どんな相手であろうが、僕には勝てっこない。それどころか、足元にも及びはしない。  
そう、いつの頃からか思っていた。

「そうだね。どんな相手でも勝てると思っていたんだ。思い上がりも甚だしいよね」

エニグマは、首を軽く横に傾ける。

「そうは言っても、人間相手なら君は無敵だろうからね。今回ばかりは、少し相手が悪かったね」

「悪魔か……エニグマも、悪魔なんだよね？」

僕の問いに、エニグマが妖しげな笑みを浮かべた。

「そうだよ。僕も悪魔さ」

「やっぱりね。そうだろうとは思っていたけど……」

「思っていたけど……何？」

「半信半疑だった。本当に悪魔がいるなんて、やっぱり信じがたいし」

エニグマが納得した顔でうなずいた。

「そうだろうね。僕ら悪魔と君たち人間が会うことはあまりないからね」

うん？ ちよつと待って。何か今、さらつと物凄く重要なことを言わなかった？

僕は慌てて問いかける。

「ちよつ、出会うことはあまりないって、どういうこと？」

エニグマは軽く肩をすくめる。

「君の周りに、これまでに悪魔と出会ったことがあると言っている者はいる？」

僕は問われて考える。そして首を横にゆっくりと振った。

エニグマは僕の仕草を見て、微笑んだ。

「そうだろう。つまりはそういうことさ」

「じゃあ、今こうして僕たちが出会っているのは、異常な状態だったってこと？」

「そう。通常、悪魔は人間に干渉かんせうしないからね」

それを聞いて、僕は眉まゆをひそめた。

「だったら君は、わざと異常な状態を作ったってこと？」

エニグマが鼻を鳴らす。

「異常な状態を作ったのは、君の方さ。僕は、あくまで君をただ観察してただけであって、干渉かんせうするつもりはなかったんだよ。それなのに君は、マフィアのアジトの屋上にいた僕を目ざとく見つけてしまった。だから、仕方なく挨拶あいさつしたんじゃないか」

僕の眉間みげんには深い皺しわが刻まれたであろう。

「僕が悪いって言いたいのか？ 僕が見つけたからって、別に挨拶あいさつなんかしなくてもいいじゃないか。君には背中の翼があるんだから、僕がアジトの階段を駆け上がっているときに飛んで逃げればよかったんだ。でも君はそうしなかった。なぜなら、それが君の意思だったからだよ。違う？」

エニグマは僕の言葉をふんふんとうなずきながら聞き終えると、ニヤリと嫌らしく口の端を上げた。

「そうだね。確かにその通りなんだけど。ただ、僕をその気にさせたのは、やっぱり君さ」意味がわからない。でも、まあいいさ。

僕は口をすぼめて肩をすくめた。

「とりあえずお礼は言っておくよ。助けてくれてありがとう」

エニグマは眉尻まゆじりを上げ、大げさに両手を大きく広げた。

「どういたしまして。他に御用はあるかい？」

僕は疲れていた。身体を吹き飛ばされ、地面にいやというほど叩たたきつけられたのだから当然だろう。だから、もうこれ以上話す気力もない。

「いや、特にはないよ」

すると、エニグマががっかりした表情を作った。

「それは残念。では、僕はこれで去るとしよう。またいつか、どこかで」

エニグマはそう言うのと、さっと踵かかとを返した。

だが途中で思い直したのか、ふと振り返った。

「そうだ。君に、プレゼントを用意しておくよ」

「何？ プレゼントって」

僕は不審な気持ちをそのまま声に出した。

エニグマは不敵に笑った。

「あとでわかるよ」

そう言った直後、エニグマの姿が揺らめいた。  
僕は驚き、彼を凝視する。

次第に揺らめきは大きくなり、そしてエニグマの姿が薄らいでいく。  
僕が啞然としていたうちに、エニグマは虚空に消え失せてしまった。

「……あ……」

僕は虚しく、ただそれだけを呟いた。

さすがは悪魔と言うべきか。突然目の前から消え失せるなんて。

それにしても疲れた。身体がふらふらだ。

僕はゆっくり膝を折り、地面に体育座りになった。

「ふう……」

目を瞑り、大きく息を吐き出しながら首を垂れた。

途端に眠気が襲ってくる。

ダメだ。眠すぎる。意識を保てる自信がない。

仕方がない。

僕は地面に横たわった。

少しだけ寝よう。少しだけ……少しだけなら……いいだろう……

そうして僕の意識は瞬く間にブラックアウトした。

\*

「カズマ……カズマ……」

誰かが僕の名前を呼んでいる。

「カズマ……大丈夫なのかい？ ……ねえ、ちよつと返事をしてよ！」

誰だろう？ 僕の名前を呼ぶのは——少し甲高くて張りがある。若いのかな？

ああ、でもなんかダメだ。頭の中で、いろんなものがぐちゃぐちゃに混ざり合っている感覚がある。  
ちゃんとものを考えられない。

僕は今、どこにいるんだっけ？ 確か……

あれ？ どうしたんだろう。思い出せない。

凄い疲れているんだ。だから思い出せない。

「カズマ、お願いだから返事をしてよ」

僕の名前をしつこいくらいに呼んでいる。

ダメなんだ。起きられないんだよ。疲れているんだ。

「死んではない。だが意識が混濁こんだくしているようだ」

先ほどまでの若い声とは別の、老成したような落ち着き払った声がした。どちらの声も、聞いたことがある気がするんだけど……

「カズマ！」

その瞬間、僕の身体がびくりと反応した。

一息に目を大きく見開く。

暗い。これは……夜だ。

えつと……僕は……確か……

仰向けに横たわる僕の視界に、懐かしい顔が飛び込んできた。

これは……レノアとゼロス！

僕はようやく意識を取り戻し、身体を起こそうとする。

だが力が上手く入らなかった。

「うう……」

思わずうめき声が口から漏れる。

そこへ、喜色満面となったレノアが叫んだ。

「カズマ！」

「……レノア……」

僕の口から、ようやくちゃんとした言葉が発せられた。

それを聞いて、レノアがさらに喜ぶ。

「よかった！ 意識を取り戻したんだね？ でも、大丈夫かい!？」

途端にレノアが不安げな顔を見せる。

僕は深呼吸をしたあと、ゆっくりとうなずいた。

そして、静かに身体を起こそうとする。

今度は上手くいった。

なんとか上半身を起こしてから、僕は二人の顔を交互に見比べた。

「ごめんね。心配かけたよね？」

レノアが首を横に大きく振る。

「そんなことは気にしなくていいさ。でも君、本当に大丈夫かい？」

「無理をすることはない。もう少し横になっていたらどうだ？」

レノアに続いて、ゼロスが言った。

「大丈夫。もう心配いらないよ。それより、いつの間にか夜になっていたんだね」

「しばらく経つても戻ってこないから、心配して来たんだけど、この奇妙な建物はなんなんだい？

それに、地下の黄金の……あれは宮殿か何かなのかい？」

レノアの問いに、僕は苦笑する。

「さあ、誰が造ったのかはわからないけど、ここに悪魔が棲みついていたのは間違いないよ」すると、レノアが身体を仰け反らせて驚いた。

「悪魔だって!?　じゃあ、もしかして……この前のエニグマが？」

「ああ、いや、そういうわけじゃなくて、でもエニグマもさっきまでここにいたんだけど、いや、そういうことじゃなくて、その、なんていうか」

「やはりまだ意識が混濁しているようだな。無理をせずに寝ているといい」

ゼロスが顔を曇らせる。

僕は慌てて手を振った。

「いや、そうじゃないんだ。順を追って説明するよ」

僕は、二人に一連の出来事を詳しく説明した。

はじめ二人は、ほとんど半信半疑といった顔だった。おそらく、まだ僕の意識が混濁しており、夢も見ているんじゃないかとも思っていたのだろう。

ただ、僕の話が詳細だったためか、次第に二人は真剣に聞き入っていく。

そして僕が語り終えるや、レノアとゼロスは驚いた表情で互いの顔を見合わせた。

「やっぱりあのエニグマは、まぎれもなく悪魔だったんだね？　それにここには、そのエニグマとは別に、グラドウスという悪魔が棲みついていたってわけだ」

レノアが僕に確認する。

「そういうこと。大変な目に遭ったよ。とんでもない強さだった」

「君が手もなくやられるなんて……さすがは悪魔というか、なんというか」

「そうだね。開いた口が塞がらないほどの差だった。根本的な種としての違いを感じたよ」

「うーん、でもそのグラドウスを、エニグマは倒したんだよね？」

「見てはいないけどね。嘘は言っていないと思う。実際、グラドウスはもう影も形もないわけだし」レノアがうなずいた。

「そのようだね。しかし、悪魔がいるというのは信じがたい話だよ」

「でも、本当にいるんだよ。僕は実際に会っている」

「もちろん、君の言葉を疑っているわけじゃない。それどころか、君の言うことは全面的に信用している。でもね、それでもなお、やっぱり自分の目で見えるまでは信じがたいのさ」

僕は納得した。相手は悪魔だ。すぐに信じられるはずもない。

「そうだろうね。僕がレノアの立場だったら、やっぱり信じ切れないだろうし」

「そう。そういうことなんだよ。結局人間っていうのは、自分の目で見えたものしか基本的には信じ



られないのさ」

僕はゆっくりと首を縦に振る。

そこへ、ゼロスが割って入った。

「いつまでもここで話していても仕方がない。下へ降りよう」

「そうだね。夜は冷えるしね」

レノアが賛同した。

僕も同感だ。

「よし、戻ろう」

僕らはそうして、この奇妙な神殿をあとにした。

窪地くぼちの上の草むらに戻ってきた僕らは、そこでしばし座って相談することにした。

「で、彼らをどうする？」

レノアが口火を切って、眼下にいる、ゼロスにとって仇かたきとなるモンスターの一族について尋ねた。

「僕が下に行ってみるよ」

僕がそれに応じる。

「行ってしまうつもり？」

レノアがささず問いかけてきた。

僕は答こたえに逡巡しゆんじゆんした。行ってしまうのか。問答無用で戦うのか、それとも話をするのか。しかし、話を通じるものだろうか。わからない。そんなことは行ってみなければわかるはずがない。

「行ってから考えるよ」

レノアが肩をすくめた。

「そういうのは考えなしっていうんだよ」

今度は僕が肩をすくめる番だ。

「それでもいいさ。ここでじっと観察していたって何も始まらない。まずは行ってみることだ」

レノアが顎あごに手を当てて考え込んだ。

「しかし……」

「大丈夫だよ。僕なら彼らにやられることはない。悪魔には完敗したけど、彼らには問題なく勝てるよ」

「それはそうかもしれないけど……」

逡巡しゆんじゆんするレノアを見かねて、ゼロスが言った。

「もし、彼らと話をするとして、どう意思の疎通そつうを図るつもりだ？」

うーん。それも考えてなかった。彼らがゼロスのように会話ができればとは限らない。

しかも、話をするにしても、どんなことを話すかだけ……  
やっぱり出たところ勝負だな。

「わからない。とにかく行ってみるよ」

レノアとゼロスが顔を見合わせた。

次いで僕に視線を合わせると、レノアが言った。

「仕方ない。確かに動かないことには何も始まらない。でも、危険を感じたらすぐに戻ってくれよ」

「わかった。じゃあ行ってくるよ」

僕は早速腰を上げた。

そして眼下の窪地を見下ろす。

先ほどとは違い、もう夜だからか、外には誰もいない。

みんな家の中にいるのだろう。だが灯りはついていない。

それも当然か。高度な知能を持つゼロスですら火を扱えないのだから。

僕はゆっくりと歩を進めて、窪地の縁に足をかける。

それから、そのまま坂を下りていく。

一歩一歩確実に、集落へと向かう。

話ができるだろうか。

わからない。そもそも言語を持たない種族の可能性もある。そうになったら、いきなり戦闘に突入するかもしれない。

そのとき、子供が目に入ったら、僕はどうするだろう。

これもわからない。出たところ勝負とは言ったものの、さすがに考えなしにもほどがあるか。

それではレノアも肩をすくめるしかないね。

でも、他に方法も思いつかない。

虎穴に入らずんば虎子を得ずだ。

僕はどんな集落に近づいていく。

すると、一軒の家から誰かが出てきた。

大柄な体格に見えるので、たぶん雄だな。

その彼が大きく伸びをした。

そして伸び終えるなり、集落を横切る川に向かう。

川にたどり着くと、ずっと腰を落とし、手で水を掬って飲みはじめた。

僕はその間も、静かにゆっくりと坂を下っている。

水を飲んだ彼は、ふと首をめぐらした。

その視線の先には――

僕がいた。

僕の目と彼の目が合った。

途端に彼が顔を上げ、天に向かって高らかに吠えた。野獣のような雄叫びが、夜の闇にこだまする。と、様々な家々の扉が開いた。次々にかの種族の者たちが飛び出してくる。

だが僕は、さらに下っていく。

彼らは、はじめは戸惑っているようだった。

だが最初の彼が僕を指さし、何事かを告げたことによって、動揺は収まった。

ということは、少なくとも彼らは言語を持っているということだ。

あとは、僕との意思疎通ができるかだが――

そのとき、彼らが横一列に並びはじめた。

僕がいぶかしんで見ていると、今度はみんな一斉に膝を折って中腰となった。

いや、さらに腰を落として、上半身を前に倒しはじめている。しまいには、手を前に伸ばして手のひらを地面につけた。

これは――僕には土下座しているように見えた。

僕は眉根を寄せつつ、彼らに近づいていく。

彼らはその間、平伏したまま微動だにしない。

僕は坂を下りきり、彼らのそばへ行く。

一歩一歩距離を詰め、彼らの三メートルほど手前のところで止まった。

「君たち、言葉はわかる？」

とりあえず話しかけてみた。言葉が通じればいいのだが――

すると、中央のひとときわ大きな者が、身体を少しだけ起こしながら言った。

「……す、すこし……わかる……」

僕は驚いた。

会話ができることを期待はしていたものの、言葉を発することができるモンスターはめずらしいという。レノアもゼロスと出会った際にはとても驚いていた。

「僕はカズマと言っただけど、君の名前は？」

「ズワウス」

「ズワウス？ 君がこの集落の代表者なの？」

ズワウスはうなずいた。

「君たちの種族の名前は？」

「ラーズ」

「ラーズ？ ラーズ族か」

ズワウスがまたもうなずいた。

よかった。どうやらちゃんと意思疎通ができるようだ。  
なら、もっと聞いてみよう。

「君たちは……その、なんか土下座しているように見えるんだけど？」  
するとズワウスが頭を下げた。

「従う」

「え？ 従う……僕につてこと？」

ズワウスが首肯した。

僕は戸惑った。

「どういうこと？ いきなり従うなんて……いや、もちろん僕もその方がいいんだけど……その理由は何？」

ズワウスは少し考えてから答えた。

「従え……言われた……」

「誰に？」

僕は間髪をいれずに問いかける。

ズワウスは返答に少し間をおいた。

「……エニグマ……」

そういうことか。エニグマが最後に言ったプレゼントって、このことか。

つまり、彼らを僕に従わせるから、あとは好きにしろつてところかな。

確かに、透明になる種族なんて、味方にしたらありがたい存在だ。斥候にすれば最高だろう。  
だけど問題は――

「君たちはネメセス族って知ってるよね？」

ズワウスはゆっくりと首を垂れた。

「君たちはそのネメセス族を根絶やしにした。そうだね？」

ズワウスは無表情のまま、うつむくようにうなずいた。

「なぜ、そんなことをしたんだい？」

ズワウスは答えた。

「命じられた」

「誰に？」

「グアドウス」

「グアドウスか。もしかして、君たちはこれまでずっとグアドウスの支配下にあったの？」  
ズワウスは苦々しそうに首を縦に振る。

「だけど、そのグラドウスはエニグマによつて倒された。君はそれを見ていた？」  
うなずくズワウス。

僕は続けて言った。

「つまり、君たちの支配権はエニグマに移った。そのエニグマが僕に従えと言った。そういうことだね？」

ズワウスはこくりと肯定する。

なるほど、そういうことか。だけど――

「それはわかった。だけど、ネメセス族を襲った理由はなんだったの？」

「玉」

やはりか。ゼロスが身体の中に隠し持っていた、ネメセス族に伝わる神様からの聖遺物――虹色の球体が、グラドウスの目的だったか。

「なぜ玉が必要だったの？」

ズワウスは少し戸惑った表情を見せた。

「……わからない……」

「それは、グラドウスは特に理由を言っていなかったってことかな？」

ズワウスはうなずいた。

「でも、それなら殺す必要はなかったんじゃないかな」

ズワウスは答える。

「殺せ……言われた……全員……殺せ」

「グラドウスに？ その理由は？」

「ネメセス……秘密……知ってる……だから」

「玉の秘密を知っているから、ネメセス族を根絶やしにしろってことか」

ズワウスは重々しく首を縦に振った。

なんてことだ。ネメセス族は虹色の玉を大事にはしていた。でもその意味は、長い年月の中で失われたという。

だから、あの玉にどんな秘密があるのかなんて、ネメセス族の誰も知らないのだ。それなのに……

「君たちは、グラドウスに言われたことをやっただけなんだね」

ズワウスは無言でうなずいた。

これは、仕方がない、と思う。あのグラドウスに命じられたら、従うほかないだろう。僕だって一撃でやられてしまったんだ。彼らが逆らえるはずがない。

だけど、僕はそれでよくても、ゼロスは――



参ったな。どうしたらいいのか。  
すると、僕の背から声がした。

「カズマ」

驚いて振り返ってみると、そこにはレノアとゼロスがいた。  
僕が気づかないうちにこの窪地に下りてきてたんだ。

「レノア、それに……ゼロス」

「どういう状況？ 彼らはどうしちゃったの？」

困惑している僕に、レノアが言った。

「どうやらエニグマに命令されたらしい。僕に従えって」

レノアは肩をすくめて、眉尻を跳ね上げた。

「へえ！ なるほど、そういうことか！」

「それで、色々と聞いていたんだけど……どうやら、彼らはこれまでずっとグラドウスに支配されてきたらしい」

「容易に想像できるね。あんな近くにとんでもない悪魔が陣取っていたんじゃ、従うしかないだろうね」

「ネメセス族を襲ったのも、グラドウスが命じたかららしいんだ」

僕はレノアに答えるようにして、ゼロスに向かって言った。

ゼロスはなんて言うだろうか。僕は待った。

すると、ゼロスが口を開いた。

「そうか……わかった」

わかったと言った？

それはつまり——ラーズ族を赦すってこと？

だけど、僕は直接そうとは尋ねられなかった。

さすがに気が引けたのだ。

それはレノアも同じだったようで、しばしの間沈黙が流れた。

その静寂を打ち破ったのは、当のゼロスだった。

「憎むべきは、グラドウスということだ」

そう言うと、ゼロスはゆっくりと身体をめぐらして、僕らから遠く離れていった。

そう。そうなんだよ。悪いのはグラドウスなんだ。彼らラーズ族じゃないんだ。

いや、もちろん彼らにもまったく罪がないわけじゃない。直接的に手を下したのは彼らなのだから。だけど、グラドウスに逆らえばどうなったか。レノアじゃないけど、容易に想像がつくことだ。

彼らには他に選択肢はなかった。従うしかなかったんだよ。

だからゼロスも、憎むべき対象はグラドウスだと言ったんだ。

僕はゼロスの寂しげな後ろ姿を眺めながら、そう思った。

僕とレノアは、その後もズワウスに色々話を聞いた。

いつまでも平伏されているのは居心地が悪いため、他の者たちには家に入るように伝え、ズワウスだけを残し、車座に腰を下ろして話を聞いた。

やはり知りたいのは、あの神殿のことである。聞けば、確かにあの神殿を築いたのは、ラーズ族らしい。

ただ、あの建物にどんな意味があるのかは、彼らは何も知らなかった。

また、ズワウスはエニグマに言われたらしい。あの神殿も、その地下の黄金も、すべて僕、カズマのものにするがいい、と。

それを聞いて、レノアは狂喜乱舞した。

それはそうだろう。国を取り戻すためには財力がある。傭兵や装備などにかかるの金額が必要となるからだ。

しかも、仮に無事に国を取り戻せたとしても、復興にはさらに莫大なお金がかかることだろう。だけど、あの黄金の量ならば、それを差し引いても充分お釣りが出る。

レノアはすぐに皮算用を始めた。顔がにやついている。

僕は軽くため息を吐くと、ゼロスを捜そうと立ち上がった。

首をめぐらし、ゼロスを捜しながら歩く。

ほどなくして、ゼロスを見つけた。

彼は川辺で四肢を折り曲げ、水の流れを眺めていた。

僕は彼に近づき、そっと声をかける。

「大丈夫？ ゼロス」

ゼロスは僕の接近に気づいていたようで、落ち着いた様子であった。

「心配はいらない」

「そう。でも、ちょっと話していい？」

僕は、ゼロスの横に座ろうとした。

ゼロスは、僕の様子を見つめながら答えた。

「ああ。もちろん構わない」

僕は安心して腰を下ろした。

「やっぱ、すぐには割り切れないよね？」

ゼロスはしばし沈黙考した。

僕はその間、無言で待った。



やがて、ゼロスが口を開いた。

「そうだな。心の整理をするには、もう少し時間がかかるな」

「そうだよ。いくら命令されたからといって、実行したのは彼らなわけだし……」

ゼロスは伏し目がちになった。

「わかってる。彼らに他の選択肢などなかったことは。だが心の整理とは、理屈とは別のものなのだ」

「感情だよ。理屈ではわかっていても、感情は別。だから、時間がかかるってことだよ」

「そうだな。だが、そんなに時間がかかりはしないだろう。わたしは今、落ち着いている。ゆえに、間もなく整理もつくと思う」

「わかった。なんか邪魔しちゃったね」

すると、ゼロスが微笑んだ。

「そんなことはない。わたしはいつでもお前を歓迎している」

「ありがとう。じゃあ、あとでね」

僕はそう言うと、すっと立ち上がった。

そして踵を返して、ゼロスのそばから立ち去った。

途中、一度だけ振り向いてゼロスを見た。

やはりその背は、寂しそうに見えた。

＊

「この集落の座標はわかった。また日を置いてここに帰ってくることにしよう」  
レノアが意気揚々と言った。

僕らはラーズ族の集落で一泊し、今後のことを話し合った。

とりあえず、モンスタージェイムの旅を切り上げ、一旦、拠点があるオルダナ王国の王都ミラベルトへ戻ることにした。

冒険者グッズの中にはかなり高度なコンパスと地図があり、それによると、この場所は森全体から見ればまだ端の方にあるらしい。なので、相応の護衛をつける必要はあるものの、黄金の採取や運搬は比較的容易に行えるとのことだった。

つまり、その手配を早速したいがために、旅を切り上げることにしたのだ。

「お金、お金。お金は大事だよ」

レノアは昨日からずっと、取りつかれたように言っている。

僕は思わず苦笑した。

「あ、また笑ったね？」

レノアに咎めるように言われ、僕は肩をすくめた。確かに、笑ったのはこれが初めてではない。

「お金が大事なのはわかるよ」

「本当に？ これは降ってわいた天恵のようなものなんだよ？ 君が持ってきてくれたグランルビ―は大事な軍資金だけど、あれだけでアルデバランを取り戻そうとするには、少々心もとなかったんだ。そこへきてあの黄金の莫大な量だ！ ああ、なんとありがたいことか。あれだけあればなんでもできるってもんさ！」

僕は浮わついたレノアを見て、再び肩をすくめた。

「はいはい。だから一旦戻るんだよね？」

「そうさ。なにせ量が多いからね。早めに段取りしておかなきゃね」

「わかったよ。じゃあどうする？ 早速出発する？」

「する！」

レノアは間髪をいれずに答えた。

僕はうなずくしかなかった。

そこへ、ゼロスが静かに近寄ってきた。

「出発するようだな」

「方針変更だ。モンスターテイムは、また後日やることにしたよ」

レノアが答えた。

「そうか。わかった」

「ゼロスはどうする？」

僕はゼロスに向かって言った。

「お前たちがよければだが、同道したいと思っている」

「本当に!? それはうれしいよ!」

「ありがたいね! でも町へ出て大丈夫かい？」

レノアも、僕と同感だったようだ。

すると、ゼロスがニヤリと笑った。

「こう見えて、わたしも若い頃は、町に出たことがある」

「そうなの？」

僕の問いに、ゼロスは微笑んだ。

「その際に、お前たちの言葉を覚えたのだ」

「そうだったんだ。じゃあ、最初からしゃべることができたわけじゃなかったんだ」

「無論そうだ。好奇心旺盛な人間がいてな。丁寧に言葉を教えてくれたものだ。初めは上手く発音

できなかったが、次第にできるようになった。今ではこのとおりだ。聞きづらくはないだろう？」

僕は笑みを浮かべてうなずいた。

「まったく問題ないよ。ものすごく綺麗な発音だよ」

「そうか。それは勉強した甲斐があったというものだ」

ゼロスはそう言って笑った。

よかった。もうすっかり元のゼロスに戻っている。どうやら心の整理ができたらしい。

僕はほっと胸をなでおろした。

「よし、じゃあ早速出発しよう」

レノアが元氣よく言う。そこへ、僕が疑問を投げかける。

「でも、ラーズ族はどうすればいい？」

レノアがにやりと口の端を上げた。

「ズワウスには綿密に話をしておいた。いずれ近いうちに僕の手の者が黄金を採りにやってくるから、よろしく頼むとね。幸いズワウスは、たどたどしいけど言葉が話せるしね。混乱はしないと思うよ。それと、いざアルデバラン奪還作戦を発動する際には、森を出て僕らに協力してもらうよう言っておいた」

「そう。それは頼もしいね」



「ああ。姿を消せるなんて能力は、斥候せつこうにもってこいだよ。それに、ちょっとした潜入とか、他にもいろいろな使い道があるね」

確かに。ラーズ族の能力は汎用性はんようせいが高そうだ。

「ところでレノア、デュランドはどうする？」

デュランドとは、この森で僕がタイムしたフロントサウルスのようなレアモンスターのことだ。

「この村に置いていく。ラーズ族同様、いざその時を迎えるまではね」

「じゃあ、三人で戻るってことだね」

レノアが我が意を得たりと、にんまりした。

「そういうこと。以前のように巨大モンスターを引きつれていくとなると、移動に時間がかかってしょうがない。今回は一刻も早く戻ることを優先させたいんだ」

どうやらレノアは、どうしても急いで黄金を換金したいようだ。

僕は苦笑した。

「わかったよ」

僕の同意を得て、レノアが大きくうなずいた。

「では改めて、王都ミラベルトへ向けて出発するでしょう！」

レノアが声高らかに宣言した。

「おう！」

僕は仕方なく応じた。

そうして僕は、ラーズ族の集落を後にして、王都へと戻ることとなった。

\*

僕らは、森を出たすぐのところにある小さな町へと入った。

すでにラーズ族の集落を後にして歩き続けること、数日が続いている。さすがに僕も疲れていた。

僕が疲れるくらいだから、レノアはもうバテバテで、今にも倒れそうなくらいだ。

「ひとまず宿に入ろう」

僕がそう言うと、死にそうな顔をしたレノアが、フラフラしながら答えた。

「……ああ……そうしてくれ……もうさすがに……倒れそうだ……」

「宿は……うん？ あの看板は、バーン商会のものかな？」

僕は道の先に、僕たちに協力してくれているバーン商会の支店を意味する看板を見つけた。すると、レノアがむくりと顔を上げた。

「バーン商会か。王都への連絡もあることだし、一旦そこへ入ろう」

「大丈夫？ 宿で休んでからにしたら？」

僕は心配してそう言うも、レノアは首を横に振った。

「一報だけでも入れておかないと。先に準備しておいてくれば、時間短縮になるしね」  
確かにそれはそうだろうけど……

僕がレノアを見ると、すでに商会の方向に足を向けている。

これは言っても聞かないな。

僕は諦めて、言った。

「わかった。じゃあ、とりあえず商会に寄ろう」

僕らは宿に入るのは後回しにして、バーン商会の支店へ入った。

「ちよつと王都に連絡したいことがあるんだけど」

フラフラしているレノアが尋ねると、カウンター越しに商会員が応じた。

「王都に？ 構わないよ。手紙でいいかい？」

「いや、速攻便で」

この一言に、商会員の目がキラリと光った。

「ほうほう、速攻便とね。高いよ？」

「金はいくらかかっても構わない。できるだけ早く王都に伝えたいことがあるんだ」

「ほうほう。それはそれは。では手配するが、前金だよ？」

レノアは懷から麻袋を取り出すと、縛つてある紐を緩めて中身を取り出した。  
何十枚もの神々しい輝きを放つ金貨だ。

「何枚いる？」

レノアの言葉に対して、商会員がニヤリと笑った。

「連絡文を速攻便で出すってことでいいんだね？ なら、一枚で充分だよ」

レノアは金貨を一枚だけ指でつまむと、カウンターの向こうにいる商会員に手渡した。

「毎度あり！ それで、受取人はどういった方で？」

「アルデバラン王国のアリアス王女殿下だ」

途端に商会員の顔つきが変わった。

ギョツと眉根を寄せて、僕らの顔をじろじろと見る。

「アリアス王女殿下だって!? もしや、あんたたち……」

商会員は目を見開き、僕とレノアの顔を交互に見ている。

ここはバーン商会の支店だ。僕らのことを聞いているのかな。

「僕はカズマ・ナカミチ。彼はレノア・オクティス」

僕がそう言うと、商会員の目がさらに大きく見開かれた。

そして、慌てた様子で手元の書類から何かを探し出した。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ ええと、これじゃない、これでもない……あった！ これだ！」  
商会員は手元の書類から一枚の紙を取り出すと、顔を上げて僕らを見た。

「あんたら、間違はなくカズマ・ナカミチとレノア・オクティスなんだな!？」

焦った様子の商会員は、あらためて僕らに尋ねた。

僕はいぶかしみながらも答える。

「はい。間違いないです」

すると、商会員はカウンターに身を乗り出し、僕とレノアの間に顔を入れて、耳打ちする。

「大変なことが王都で起きたんだ。それで、バーン商会の全支店に通達が出ていたんだ。カズマ・

ナカミチとレノア・オクティスが現れたらその件を伝えるようにってな」

僕は驚きながら、問いかけた。

「何があっただんですか？」

商会員は一度つばを飲み込み、僕らの顔を交互に見てから口を開いた。

「――アリアス王女殿下が刺客に襲われたんだ」

僕はギョツとして、二の句が継げなかった。

代わりに、レノアが怒りをあらわにしながら勢い込んで尋ねる。

「なんだと!? 殿下はご無事なのか!？」

商会員は困った顔で首を横に振った。

「怪我を負われたのは間違いない。だが、怪我の具合はそれほど大したことはないらしい。少なくとも、命に別条はないようだ」

僕は少しだけ胸をなでおろした。

だが、レノアの怒りは収まらない。

「くそっ！ やったのは誰なんだ!？」

レノアが叫ぶと、商会員が手元の資料を読みつつ、衝撃的なことを口にする。

「犯人はワイズマンという男らしい。でも逃げられたみたいだな」

なんだって!? ワイズマンが!? どういうことだ? ワイズマンがなぜ……訳がわからない。

ワイズマンは、僕たちに敵対するゼークル伯爵の用心棒だったけど、彼に嫌気がさして僕たちの側についたはず……

天井を睨んだレノアがまた叫んだ。

「ワイズマンのやつめ！ どういうつもりだ！ 僕らを騙したのか!？」

なんてことだ。疲れている場合じゃない。とんでもないことが起こってしまった。

そのときレノアが、決意を込めた表情で言った。

「速攻便はやめだ。代わりに、僕らを王都まで最速で運んでほしい。できるか？」  
商会員は真剣な表情でうなずいた。

「わかった。王都までの途中の町に、それぞれ替えの馬車を用意させる手配をしておく。あんたたちはこっちへ来てくれ」

商会員はカウンターから出ると、そのまま店の外へと出た。

僕らはその背を追う。

商会員が馬車屋の前で大声で言った。

「おい！ 一番イキのいい馬車を用意してくれ！」  
すると、店の奥から男が出てきた。

「おお！ バーン商会の、ちょっと待ってな」

男は店の奥に引っ込んだが、すぐに奥から馬車を引いて戻ってきた。

「こいつがうちの店で一番イキがいいぜ」

商会員は馬の様子を鋭い眼差<sup>まなざ</sup>しで検分してから、馬車屋の男に向き直った。

「いいだろう。超特急だ。カーロンの町までひとつ走りしてくれ」

「カーロンだって!? ずいぶんと遠くまでだな」

「最終目的地は、王都ミラベルトだ」

「なんだって!? そうか、乗り継ぎか」

「そうだ。カーロンにはわたしから連絡しておく。腕のいい御者<sup>ぎよしや</sup>はいるか？」

馬車屋が渋い顔をした。

「いやそれが、今ちよつと手薄なんだよ」

「それは困る！ 誰かいらないのか？」

商会員が馬車屋に詰め寄る。

「どうやらこは、僕の出番のようだ。」

「御者<sup>ぎよしや</sup>は僕がします」

商会員は僕を見ていぶかしんだ。

「あんたが？ 大丈夫なのか、だいぶ疲れているように見えるが……」

僕は商会員に対して、にっこりと微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。

「大丈夫です。僕は馬の扱いに長けてますから」

レノアがうなずきながら僕の案に同意した。

「カーロンまでは彼が御者<sup>ぎよしや</sup>をする。ただ、それ以降は御者<sup>ぎよしや</sup>も用意しておいてほしい」

商会員は首を縦に振った。

「わかった。じゃあ、行く先々の町へは伝言鳥<sup>でんごんとり</sup>を飛ばして連絡しておく」

商会員の回答にレノアは満足げに首肯すると、僕に向き直った。

「では頼むよ。カズマ！」

レノアが言う前に、僕は御者台ぎょしやだいに乗っていた。

「いつでもいいよ！」

レノアも無言で馬車に乗り込む。ゼロスも続いた。

「二人とも乗ったね。じゃあ連絡をよろしくお願いします！」

僕は商会員に向かって言うなり、手綱たづなを勢いよく振った。

すぐに馬が反応して歩き出す。

そうして僕らは商会員と馬車屋が見送る中、王都ミラベルトに向けて出発した。

## 第二章 潜入？

僕らが一昼夜をかけて走り切り、王都ミラベルトに到着したのは、まだほの暗い明け方であった。

だが、まだアリアスの居館ぎょくまではもう少しある。

御者ぎょしやが最後のひと踏ん張りとはかりに、手綱たづなを振る。

木製の車輪が石畳を激しく叩くたた。

まだか。まだ居館は見えないか。

レノアは疲れ切って、気絶したように僕の隣で眠っている。

ゴトンッ！

最高速で駆け抜けているため、ちよつとしたものを踏んでも馬車は大きく跳ねるは。

でも、レノアは起きない。

いや、それでいい。レノアは頭脳担当だ。疲れていてはあまり意味をなさない。少しでも眠って、元気を取り戻してもらわねば。